

『長部註』における pamāda (放逸) と appamāda (不放逸) について

アルコール依存のような様相に注目して¹

越後屋 正 行

1. 序

南方上座部大寺派における註釈家の泰斗ブッダゴース (Buddhaghosa)²が431~434年頃³に編纂した『長部註』(*Sumaṅgalavilāsinī*)に見られる pamāda (放逸) の註釈(解説)には、「アルコール依存」に近い症状の意味と「酩酊」をふくんだ「放逸」の意味とが付されている。そして「[飲酒の過失]を起すか、起ささないかが「意思をもった飲酒」であるか(放逸)、そうではないか(不放逸)を判断する基準になり得る」ことを越後屋正行[2018]で指摘した。このアルコール依存というのは、森口眞衣[2012: (275), (277)]によると、アルコールの慢性飲用に伴って発生する精神病性障害(酒がやめられないという精神依存、さらに耐性が形成されて飲酒量が増加し、身体依存へと移行して様々な精神障害が現れる状況)のことである。

本論文は前回の論文を補完することを目的とし、南方上座部大寺派で「アルコール依存のような様相」がどのように把握されていたのかを明らかにしていく。このことによって「アルコール依存のような様相」に対しては appamāda (不放逸) の実践が現代医学の観点からも有効な手段であることが知られ、南方上座部大寺派における修行観の一端が明らかになることが期待できる。

2. アルコール依存のような様相の用例

この pamāda は「強意」を示す接頭辞の pa- (pra-) をともなった pa-√mad から構成される名詞である。この mada (√mad) については、森口眞衣[2012: (275, 277)]が古代インド医学では「アルコールの酩酊症状」(興奮した状態)の総称として、医学書では「急性アルコール中毒⁴に近いもの」として理解されていたと指摘している。また森口眞衣

1 本論文の制作に当たっては、新潟県林昌寺副住職小池昌慈氏の生き様や助言によるところが多い。氏には深い謝意を表す。

2 ブッダゴースについては、森祖道[1984: 469-529]を参照。漢訳語で「仏音」「覚音」、南インド出身とされている。

3 森祖道[1984: 552]を参照。

[2012: (278)] は、インド医学書⁵である Carakasamhitā (6世紀頃成立)における mada-atyata (「酩酊」が過ぎる)、Suśrutasaṃhitā (6-7世紀頃成立)における pāna-atyata (「(酒を) 飲むこと」が過ぎる)などの用例を提示し、この用例が「madaに続く形で、しかもより重いものとして提示されていることから、当時でもアルコールの慢性飲用から依存が生じること自体は臨床的に把握されていた可能性があるだろう。もちろん現代と同じような「依存」という意味合いの語は用いられていないが、依存という病態そのものは急性酩酊症状としての mada とは区別され、別の名称が与えられていたと考えられる」と指摘している。この指摘で注目すべき点は、「アルコール依存のような様相」が mada 以外の語句で示されていたということである。

ここからは、この√mad (酩酊、酔、狂喜)を手がかりにして周辺に列記された語句や文脈に注目しつつ、「酔い」や「酩酊」に関連した語句に「アルコール依存のような様相」の用例が見られるのかを『長部』(Dīghanikāya)と『長部註』とを中心にしたパーリ三蔵とアッタカター文献とに確認していく。

『長部』「シンガーラ経」では、仏が居士の子シンガーラカ(Siṅgāḷaka)に以下のように説法している。

「無財、無所有で、酒があり、井戸に行き、飲んでいる大酒家(pipāsa)は、水のように借金に入りこみ、急速に自分の家がなくなるであろう。日中に睡眠する⁶習慣により、夜に起きることを嫌い、常に酔っている酒飲みによっては(niccamaṃ mattena soṇḍena)、家に居住することができない⁷」(DN: III. 150 [185⁸])

対応する法蔵部所属の『長阿含経』「善生経」(訳出年代は412~413年頃。訳者は仏陀耶舎・竺仏念)にも「昼に寝て、夜に起きてとても不満に思いなげく⁹」などの記述があるが、飲酒との関連性は明確でない(T1. 71a)。そこでこの下線部に注目すると、飲酒によって常に酔っている(matta, 慢性飲用)といった「アルコール依存のような様相」の用例がパーリ三蔵ですでに確認できるのである。また「常に酔っている」対象の語句が「酒

4 森口真衣 [2012: (275), (279)] によれば、急性アルコール中毒の酩酊症状は単純酩酊・異常酩酊に区分される。この単純酩酊はアルコールの飲用量によって亜臨床期(=変化なし)・発揚期(=ほろ酔い状態)・酩酊期(=できあがった状態)・泥酔期(=千鳥足状態)・昏睡期(=生命危機状態)という五段階に分けられる。異常酩酊は酩酊により平時と異なる行動が出現し、複雑酩酊と病的酩酊に区分される。

5 これらのインド医学書の成立過程や内容について適宜、大地原誠玄 [1979]、矢野道雄 [1988]、森口真衣 [2008]などを参照した。

6 soppa. R': はうことの(suppanā)。

7 yo vāruṇī addhano akiñcano, pipāso pivama papāgato, udakamiva iṇama vigāhati, akulaṃ kāhiti khippamattano. na divā soppasīlena, rattimuttānadesinā, niccamaṃ mattena soṇḍena, sakkā āvasitūṃ gharam.

8 引用の表記について、たとえば、DN: III. 150 [185] という場合、ローマ数字は巻数を示し、アラビア数字はページ数を示している。そして [] は、R'の巻数とページ数(III. 185)になり、それ以外はB'の巻数とページ数[III. 150]になる。なお巻数がB'と同じ場合はR'の方を省略し、巻数とページ数がB'とR'でまったく同一であるならば、[] (R')を省略する。

9 夜覚多悵望。

飲み (sonḍa)」である点にも注目しておく。この「酒飲み (sonḍa)」のサンスクリット語は「śauṇḍa」で「～に耽る、おぼれる、熱愛する」という意味があるので、酒に対する習慣性がうかがえる。

この「常に酔っている」という内容を基軸として『長部註』は、以下のような伝承を記載している。『長部註』「ポッタパーダ経註」は「伝え聞くところでは (kira)、夜叉の女性の奴隷たちはすべての夜にわたり、神々への供物をしながら踊り、歌った。そして朝焼けの生起 (aruṇodaya) において一杯の穀酒の鉢を飲み (surāpātīm pivitvā)、転がり、眠り、日中に起き上がった¹⁰⁾ (DA: I. 304-305 [370]) と伝えている。『長部註』「シンガーラ経註」は「伝え聞くところでは、以前にその場所である王が庭園で遊戯するためにやって来て、穀酒で酔い (surāmadena matto)、日中に (divā) 睡眠に入った。彼の従者は『王は眠っておられる』と〔重い〕花・果実などを求めながら、あちこちに進んだ¹¹⁾ (DA: III. 124 [941]) と伝えている。

前者の伝承は早朝から飲酒すること、後者の伝承は日中から飲酒することであり、その飲酒することで寝てしまうといった「アルコール依存のような様相」の用例である。さらに杉本卓洲 [1985: 82] によれば、『本生註¹²⁾』の記載では「酒祭り」(surācchaṇa, surānakhatta) と称される祭りの存在があったということを指摘している。その内容の一端は、町で七日間男女問わずに酒を飲みつけ、非常ににぎやかさの中で祭りの遊び (chaṇakīlā) に打ち興じていたことで人々の喧嘩や町が荒れ果てるなどといったトラブルも続出したというものである。ここから「常に酔っている」というのは時間帯や男女を問わず四六時中、いつでも飲酒している「アルコール依存のような様相」として把握されていたと考える。

つぎに『長部』「シンガーラ経」における「放逸の原因になる穀酒・果酒の行為 (surāmerayamajjappamādaṭṭhānānuyoga)¹³⁾ (DN: III. 148 [182]) という記述を註釈するかたちで『長部註』「シンガーラ経註」は、以下のように説明している。

「放逸の原因になる穀酒・果酒の行為 (surāmerayamajjappamādaṭṭhānānuyogo) というこのうち、穀酒 (surā) とは、小麦酒、餅酒、米酒、酵母酒、合酒という五の穀酒である。果酒 (merayaṃ) とは、花酒、果酒、蜜酒、糖酒、合酒という五の酒である。

10 yakkhadāsiyo kira sabbarattim devatūpahāraṃ kurumānā naccitvā gāyitvā aruṇodaye ekam surāpātīm pivitvā parivattitvā supitvā divā vuṭṭhahanti.

なお『長部註』『長部復註』の翻訳については越後屋正行 [2016a, b] が全訳しているので、それらを適宜参照した。

11 pubbe kira aññataro rājā tattha uyyānakīlanattham āgato surāmadena matto divā niddam okkami. parijanopissa, “sutto rājā”ti pupphaphalāḍḍhī palobhiyamāno ito cito ca pakkāmi.

12 この『本生註』は、森祖道 [1984: 192-193] によると、アッタカター文献史上における位置づけが明確なものでない。前田恵学 [1964: 738] は、ブッダゴサ作も疑われていると指摘している。v. Hinüber, O [1996: § 260] も、ブッダゴサの註釈書が『本生義註』(Jātaka-atthavaṇṇanā) に戻って参照することはないと述べている。

13 対応する『長阿含経』『善生経』では、「飲酒」(T1. 70c) と記載している。

そのすべては、醗酏 (mada) を作ることによって酒 (majjam) である。放逸の原因 (pamādaṭṭhānam) とは、放逸の原因である。意思 (cetanā) をもってその酒を飲むという、これがその同義語である。行為 (anuyogo) とは、その穀酒・果酒という放逸の原因を何度も実践すること (anuanuyoga)¹⁴、くり返しすること (punappunam karanam) である¹⁵」(DA: III. 127 [944])

この下線部における「何度も」「くり返し」という言葉についての解釈は現代医学の観点も取り入れると三通り考えられる。第一は、一回の飲酒で何度もくり返し飲み続ける、すなわち深酒や大酒といったような様相であり、「急性醗酏症状」や「興奮した状態」や「急性アルコール中毒のような状態」を引き起こすものである。第二は、飲酒しては睡眠をとり、また飲酒すると時間帯を問わず毎日のように飲酒をくり返し続けるといったような様相であり、「アルコールの精神依存¹⁶のような様相」を引き起こすものである。第三は、第一と第二を組み合わせたもの、すなわち時間帯を問わず毎日のように深酒や大酒をくり返し続けるといったような様相であり、「アルコールの身体依存¹⁷のような様相」や「アルコール依存のような様相」を引き起こすものである。どの解釈が正しいかは不明で

14 『大義釈註』によると、「実行すること (anuyogam)」(MNdA. 310 [II. 353]) になる。

15 **surāmerayamajjappamādaṭṭhānānuyogoti** etha **surāti** piṭṭhasurā pūvasurā odanasurā kinṇapakkhittā sāmbhārasamyuttāti pañca surā. **merayanti** pupphāsavo phalāsavo madhvāsavo guḷāsavo sambhārasamyuttoti pañca āsavā. taṃ sabbampi madakaraṇavasena **majjam. pamādaṭṭhānanti** pamādakāraṇam. yāya cetanāya taṃ majjam pivati, tassa etaṃ adhivacanam. anuyogoti tassa surāmerayamajjappamādaṭṭhānassa anuanuyogo punappunam karanam.

『小誦註』によると、「pamādaṭṭhānanti」以下の註釈が次のようになる。

pamādaṭṭhānanti yāya cetanāya taṃ pivati ajjoharati, sā cetanā madappamādahetuto pamādaṭṭhānanti vuccati, yato ajjoharaṇādhippāyena kāyadvārapavattā surāmerayamajjānam ajjoharaṇacetanā, “surāmerayamajjappamādaṭṭhānaṃ”ti veditabbā.

「放逸の原因 (pamādaṭṭhānam) とは、意思をもってそれを飲む、飲みくらすという、その意思は醗酏・放逸を因とするから放逸の原因と説かれる。飲みくらす意趣によって身門 (kāyadvāra) に起こされた穀酒・果酒を飲みくらす意趣があるので、『放逸の原因になる穀酒・果酒』と知られるべきである」(KhpA. 16 [26])

ここでは飲酒の意思というのが身体を入口 (dvāra) として発生するものとして解説されている。さらに『如是語註』は、以下のように説明している。

lakkhaṇato pana yathāvuttassa surāmerayasāṅkhātassa majjassa bījato paṭṭhāya madavasena kāyadvārapavattā pamādacetanā **surāmerayamajjappamādaṭṭhānam**. tassa majjabhāvo, pātukamyatācittam, tajo vāyāmo, ajjoharaṇanti cattāro sambhārā. akusalacitteneva cassa pātabbato ekantena sāvajjabhāvo. ariyasāvakanāma pana vatthum ajanāntānampi mukham na pavisati, pageva jānantānam. aḍḍhapasatamattassa pānam appasāvajjam, aḍḍhālhakamattassa pānam tato mahantaṃ mahāsāvajjam, kāyasañcālanasamattham bahum pivitvā gāmaghātakādikammaṃ karontassa mahāsāvajjameva. 「相としては、すでに説かれた穀酒・果酒と名づけられた酒の種子以後、醗酏によって身門に起こされた放逸の意思が放逸の原因になる穀酒・果酒 (surāmerayamajjappamādaṭṭhānam) である。それには酔いの状態、飲むことを望む状態の心、それに応じる努力、飲みくらすことという四の資糧がある。不善の心によってそれが飲まれるべきであるから、一向に有過失の状態である。つぎに聖弟子たちが事柄を知らないまま、口にて飲むことはなく、知っている場合はなおさらである。一合半の量の飲料は小さな過失となり、一升半の量の飲料はそれよりも多いので、大きな過失となる。身体の動揺が可能となる多くのものを飲んで、村落破壊などの業を作っているならば、大きな過失となる」(ItA. 221 [II. 53])

ここでは実際の飲酒量で過失が説明されている点が興味深い。また種子 (bīja) という語句に注目すると、唯識思想と飲酒 (放逸の意思) とが関係しているのかもしれない。

16 斎藤学・柳田知司・島田一男 [1979: 51-52] を参照。

17 斎藤学・柳田知司・島田一男 [1979: 52-53] を参照。

あるが、いずれにしてもこの下線部は、意思をもって放逸の原因となる飲酒行為をくり返し続けるアルコールの慢性飲用の用例であることは間違いないであろう。

そして『長部』「マハースダッサナ経」には、「賭博師、酒飲み (sonḍa)、大酒家 (pipāsā) である¹⁸」(DN: II. 141 [172]) という記述がある。この記述に対して『長部註』「マハースダッサナ経註」では、「賭博師 (dhuttā) とは、博徒である。酒飲み (sonḍā) とは、穀酒の酒飲みである。彼らはくり返し飲むことを望む状態 (punappunaṃ pātukāmatā) によって大酒家 (pipāsā) である¹⁹」(DA: II. 209 [617]) と解説している²⁰。

この解説から「大酒家」の語句には「飲酒したい」という欲求や欲望 (kāmatā) をともなった飲酒行為の継続が示されており、「アルコール依存のような様相」の一端を述べたものであると考える。

上記をまとめると、「酒飲み (sonḍa)」と「大酒家 (pipāsā)」という語句には、アルコールの慢性飲用によって常に酔っている状況やその慢性飲用に欲求や欲望 (kāmatā) をともなった状況が見られ、「アルコール依存のような様相」が確認できた次第である。

つぎに mada と pamāda という語句に注目すると、『長部』「ウドゥンバリカ経」は、「彼(苦行者)はその苦行によって酔い (majjati)、夢中になり (mucchati)、放逸 (pamāda) を起こします²¹」(DN: III. 34 [42]) と記載し、仏が苦行者の悪いところを述べている。対応する『長阿含』「散陀那経」では、「その苦行者はお高くなり(貴高)、おごり(僞慢)、強い慢心(増上慢)があります²²」(T1. 48a) と記述している。この「酔い」は√madで、内容としては酒によって酔うことではなく、「酔いしれる、陶酔する」という意味である。そして「夢中になり」は√murch(気絶、夢中、無意識)であり、「放逸」はpa-√madである。これに対応する『長部註』「ウドゥンバリカ経註」は、以下のように解説し

18 dhuttā ahesuṃ sonḍā pipāsā.

なお『長阿含経』「遊行経」には、酒飲み (sonḍa) や大酒家 (pipāsā) に対応する記述は存在していない。

19 dhuttāti akkhadhuttā. sonḍāti surāsonḍā. teyeva punappunaṃ pātukāmatāvasena pipāsā.

20 『長部』「シンガーラ経」には、以下のような記述がある。なお対応する『長阿含経』「善生経」には、酒飲み (sonḍa) や大酒家 (pipāsā) に対応する記述は存在していない。

ye dhuttā, ye sonḍā, ye pipāsā, ye nekatikā, ye vañcanikā, ye sāhasikā.

「賭博師たち、酒飲みたち、大酒家たち、詐欺師たち、欺瞞者たち、暴力者たち」(DN: III. 149 [183])

この記述に対して『長部註』「シンガーラ経註」には、以下のような解説がある。

dhuttāti akkhadhuttā. sonḍāti itthisonḍā bhattasonḍā pūvasonḍā mūlakasonḍā. pipāsāti pānasonḍā. nekatikāti patirūpakena vañcanakā. vañcanikāti sammukhāvañcanāhi vañcanikā. sāhasikāti ekāgārīkādīsāhasikakammakārino.

「賭博師たち (dhuttā) とは、博徒たちである。酒飲みたち (sonḍā) とは、女性に耽る酒飲みたち、食に耽る酒飲みたち、菓子に耽る酒飲みたち、元金に耽る酒飲みたちである。大酒家たち (pipāsā) とは、酒の酒飲みたちである。詐欺師たち (nekatikā) とは、相似によって騙す者である。欺瞞者たち (vañcanikā) とは、面前で騙すことによる欺瞞者たちである。暴力者たち (sāhasikā) とは、一軒の家などに対して暴力的な業をする者たちである」(DA: III. 130 [947])

これらの記述からも「酒飲み」→「大酒家」という順番には共通性がある。そして「大酒家」の註釈内容については、飲酒行為をくり返し続けるといった「アルコール依存のような様相」は見られない。したがって『長部註』「マハースダッサナ経註」における「くり返し飲むことを望む状態」という記述は、飲酒行為をくり返し続けるといった「アルコール依存のような様相」を示すものとして特徴的である。

ている。

「酔い (**majjati**) とは、慢心と驕慢を作ることによって (*mānamadakaraneṇa*) 酔いということである。夢中になり (**mucchati**) とは、夢中になり、執着し、罪を犯しということである。放逸を起こします (**pamādamāpajjati**) とは、『これだけが核心 (*sāra*) である』という放逸を起こしますということである²³」(DA: III. 20 [836])

この解説によると、漫然 (判然) とした悪しき状況から確固 (核心) たる悪しき状況へと至る様子が確認できる。そして『分別論』は、以下のような説明をしている。

「そのうち、**mada** とは何か。酩酊、酔い、夢中、慢、思量、思惟、高慢、狂い、幡、高揚、心の高挙である。これが **mada** と説かれる。

そのうち、**pamāda** とは何か。身悪行、あるいは口悪行、あるいは意悪行、あるいは五の妙欲²⁴における心の棄捨、棄捨を与えること、もろもろの善法を修習するために恭敬をしないこと、常に行わないこと、停止しないで所作しないこと、習慣に執着すること、欲に任せること、荷物を放棄すること、習行しないこと、修習しないこと、多く行わないこと、決意しないこと、実践しないこと、放逸である。このような放逸が酔うこと、我儘になることである。これが **pamāda** と説かれる²⁵」(Vibh. 363 [350])

この説明から判断すると、**mada** は心の高揚 (*ketukamyatā*) や興奮の状態でありながらも、思量 (*maññanā*) や思惟 (*maññitatta*) といった意識や分別がまだ残っている状態であると言える。一方の **pamāda** は心を捨てて (*vossagga*)、責任を放棄した欲任せの状態であ

21 so tena tapasā majjati mucchati pamādamāpajjati.

ここでは√mad → √murch → pa-√mad という順番であるが、『中部』『餌食経』は、以下のように記載している。

imaṃ me nivāpaṃ nivuttaṃ migajātā anupakhajja mucchitā bhojanāni bhuñjissanti, anupakhajja mucchitā bhojanāni bhuñjamānā madaṃ āpajjissanti, mattā samānā pamādamāpajjissanti.

「私によってこの餌が撒かれると、鹿の群は入りこみ、夢中 (*mucchita*) になって食物を食べるであろう。入りこみ、夢中になって食物を食べているならば、陶酔 (*mada*) を起こすであろう。陶酔になっているならば、放逸 (*pamāda*) を起こすであろう」(MN: I. 206 [151])

この記載では、√murch → √mad → pa-√mad という順番になっており、その順番に統一性は見られない。

22 彼苦行者、貴高橋慢増上慢。

23 **majjati**ti mānamadakaraneṇa majjati. **mucchati**ti mucchito hoti gadhito ajjhāpanno. **pamādamāpajjati**ti etadeva sāranti pamādamāpajjati.

24 好ましい色・声・香・味・触に対する五種の感官 (眼・耳・鼻・舌・身) の欲、欲望のこと。

25 tattha katamo mado? yo mado majjanā majjitattaṃ māno maññanā maññitattaṃ unnati unnāmo dhajo sampaggāho ketukamyatā cittaṃ. ayaṃ vuccati "mado".

tattha katamo pamādo? kāyaduccarite vā vacīduccarite vā manoduccarite vā pañcasu vā kāmagunesu cittaṃ vossaggo vossaggānuppadānaṃ kusalānaṃ vā dhammānaṃ bhāvanāya asakkaccakiriyatā asāttaccakiriyatā anattākkiriyatā oṭṭānāvuttitā nikkhattachandatā nikkhattadhuratā anāsevanā abhāvanā abahulikkammaṃ anadhīttānaṃ ananuyogo pamādo, yo evarūpo pamādo pamajjanā pamajjitattaṃ. ayaṃ vuccati, "pamādo".

ると言える。

上記の内容は飲酒で酔っていく過程ではなく、精神的な過程を示したものではあるが、おそらくは実際に飲酒で酔っていく過程の精神障害状況とも通じるところがあるのではないか²⁶。

それでは実際に飲酒で酔っていく過程や「アルコール依存のような様相」が、 $\sqrt{\text{mad}}$ や $\text{pa-}\sqrt{\text{mad}}$ とどのように関わるのであろうか。『本生註』466話では、デーヴァダッタ (Devadatta) の前世が五百の家族を率いる愚かな大工であり、彼らは海で遭難してある島にたどり着いた。その島の住民が彼らに「神々が怒るので、この島では大小便をしたら隠しなさい」と助言したという場面がある。そののち、以下のような展開になっていく。

「後の時分において彼らすべて（愚かな大工が率いる五百の家族）は、そこで安樂に住みながら粗大な身体になって、『久しく穀酒 (surā) を飲んでいない。糖味によって果酒 (meraya) を作って飲もう』と考えた。彼らは果酒を作って飲み、酩酊 (mada) によって歌ったり、踊ったり、遊んだりして放逸 (pamatta) となり、それぞれの場所で大小便をして覆わず、島を嫌悪なもの、厭逆なものにした²⁷」(JA: IV. 163 [161])

この下線部から久しぶりに酒を飲んだという状況が知られ、おそらくアルコールが五臓六腑にしみわたり、急激に酔ってしまったことが想定できる。その結果、急性酩酊症状となって歌、踊り²⁸、遊びにふけてしまったのであろう。「飲酒の過失²⁹」という点から見れば、歌、踊り、遊びは騒がしくして周りに迷惑をかける程度なので、軽い過失であると言える。ここからは飲酒した者たちが興奮した状態や急性アルコール中毒のような状態になったことが確認できる。

そしてこの急性酩酊症状としての mada を経過して放逸 ($\text{pa-}\sqrt{\text{mad}}$) となった結果、助言を忘れてしまうほど不注意な精神状態になってしまい、大小便で島のあちこちを不快なものにしてしまったのである。こののち（何日かを経て）、神々が怒って島を水で流し

26 森口眞衣 [2012: (275)] は、「現代医学においてアルコール関連問題は主に精神医学領域の対象」であるとして、森口眞衣 [2012: (279. n1)] は、「アルコールは覚醒剤やコカインなどと同様に強い依存性と耐性をもつ物質で、中止すると不快な離脱症状が出現するため習慣的に摂取するようになる「依存性」が形成される。またアルコールを摂取して得られる快適状態が次第に摂取量を増やさないと得られなくなる「耐性形成」も大きな問題である。さらにアルコールへの依存が進むと精神機能や運動機能にも異常をきたし、幻覚・妄想・麻痺・記憶障害を発症する」と述べている。

27 aparabhāge sabbepi te tattha sukhaṃ vasantā thūlasarīrā hutvā cintayim̐su, “ciraṃ pītā no surā, ucchurasena merayaṃ katvā pivissāmā”ti, te merayaṃ kāretvā pivitvā madavasena gāyantā naccantā kīḷantā pamattā tattha tattha uccārapassāvaṃ katvā appaticchādetvā dīpakam̐ jeguccham̐ paṭikūlam̐ karim̐su.

28 酒と歌・踊りとの関係性についてはパトリック・E・マクガヴァン（著）、藤原多伽夫（訳）[2018: 47-53] を参照。世界中の遺跡調査（考古学）や文化人類学や遺伝子分析などの多彩な観点から、歌や踊りの創作や創造に酒が資することを述べている。

29 これについての詳細は越後屋正行 [2018] を参照。インド・スリランカ仏教圏で歴史的に展開していったさまざまな「飲酒の過失」は 1 種 → 6 種 → 10 種 → 15 種以上 → 34 ~ 36 種と増大していくことになる。

てしまい、彼らは亡くなってしまいます。ここから想定できることは、彼らの飲酒から神々の鳥流しまでの期間を加味すると、数日間は飲酒をくり返して、島のあちこちを大小便で汚し続けたのではなかろうか。すなわちこれもアルコールの慢性飲用といった「アルコール依存のような様相」の用例であると考え。さらにまた「飲酒の過失」という点から見れば、最終的に自分たちの死に至るほどの過失であるから、非常に重い過失であると言える。

これらをまとめると、急性酩酊症状としての *mada* を経て「アルコール依存のような様相」を引きおこす精神的な放逸状態 (*pa-√mad*) に至るといふ、いわば「酩酊 (*mada*) によって前後不覚 (*pamāda*) になる」といった因果関係が示されたと考え。

つぎに『本生註』537話では、昔の話としてバラモンの子の顛末を以下のように伝えている。この子は他の青年たちによって騙されて、生れて初めて酒を飲まされてしまったのである。

「このように彼 (バラモンの子) がくり返し (*punappunam*) 飲んでいることで酔った時 (*mattakāla*) に、彼ら (青年たち) は『これは蓮の蜜ではない。これが穀酒である』と言った。彼は『これだけの時間、このような蜜の味を知らなかった。友よ、穀酒を持ってきてください』と言った。彼らは持ってきて再び与えた。〔彼は〕 渴き (*pipāsā*) が強くなった。そこで彼が再び求めていると、彼らは『〔酒が〕 尽きてしまった』と言った。彼は『さあ友よ、それ (酒) を持ってきてください』と〔言つて〕 印章のついた指輪を与えた。彼は一日中 (*sakaladivasam*)、彼らとともに飲んで酩酊し (*matta*)、目が赤くなって震えて、奇声を発しながら家に行き、横臥した³⁰」
(JA: V. 505 [466-467])

こののち、酒を飲んだことがバラモンの父にばれてしまい、酒を止めるように説得されるが、バラモンの子は「離れることができない (*na sakkomi viramittum*)」と言った。そして父によって子は家から追放されてあちこち放浪したのち、やがて亡くなってしまふという伝承である。この下線部に注目すると、くり返し一日中でも酒を求めて飲み続けるという状況が知られる。その結果、*√mad* (酔い、酩酊) が起こって目が赤くなる、震える、奇声を発するといった急性酩酊症状や興奮した状態や急性アルコール中毒のような状態が生まれたのであろう。やがては「酒が止められない」状況といった「アルコール依存のような様相」が見られることになり、「飲酒の過失」としても最悪の死に至るといふ結末に

30 *evamassa punappunam pivantassa mattakāle*, “na etaṃ pockkhamadhu, surā eṣā”ti vadiṃsu. so “ettakam kālaṃ evaṃ madhurarasam na jānim, āharatha, bho, suran”ti āha. te āharitvā punapi adamsu. pipāsā mahatī ahoṣi. athassa punapi yācantassa, “khīṇā”ti vadiṃsu. so “handa taṃ, bho, āharāpethā”ti āṅgulimuddikaṃ adāsi, so sakaladivasam tehi saddhim pivitvā matto rattakkho kampanto vilapanto gehaṃ gantvā nipajji.

なる。

ここではくり返しの飲酒による√madを原因として「急性酩酊症状」、「興奮した状態」、「急性アルコール中毒のような状態」、「アルコール依存のような様相」が観測されている。したがって上述したインド医学書のようにmadaを急性酩酊症状として厳密に把握するといった区分(規定)は、南方上座部大寺派では希薄だったのではないかと考える。いずれにしても、この√madにも「アルコール依存のような様相」の用例が確認できたとと言える。

以上、パーリ三蔵とアッタカター文献とを用いて、「アルコール依存のような様相」の用例を概観してきた。パーリ三蔵(長部)において飲酒によって常に酔っている(慢性飲用)といった「アルコール依存のような様相」が「酒飲み(sonḍa)」の語句にすでに見られた。さらにアッタカター文献(長部註)を確認したところ、「酒飲み」の語句には時間帯や男女を問わず四六時中、いつでも意思をもって放逸(pamāda)の原因となる飲酒行為をくり返し続けるアルコールの慢性飲用といった「アルコール依存のような様相」の意味が付されていた。

そしてパーリ三蔵(長部)で述べられる「大酒家(pipāsa, pipāsā)」の語句は、アッタカター文献(長部註)の解説によると、「飲酒したい」という悪質な欲求や欲望(kāma)をともなった「アルコール依存のような様相」の意味が付されることになる。

つぎにmada(√mad)とpamāda(pa-√mad)という語句については、パーリ三蔵(長部)と漢訳(長阿含経)とアッタカター文献(長部註)とを調査した結果、実際に飲酒で酔っていく過程の精神障害状況と通じる可能性があるのではないかと指摘した。またアッタカター文献(本生註)によると、飲酒で酔っていく過程については「酩酊(mada)によって前後不覚(pamāda)になる」といった因果関係が示されている。さらには飲酒行為の継続による√madの状態は、「急性酩酊症状」や「興奮した状態」や「急性アルコール中毒のような状態」や「アルコール依存のような様相」を引きおこし、アルコールの慢性飲用によって「酒が止められない」状況に陥り、「飲酒の過失」として最悪の死に至る場合もあると示されている。

さて、ここまで引用してきたアッタカター文献のうち、『長部註』はインドやスリランカを起源とする前3世紀から紀元後4世紀冒頭³¹にわたって成立してきた計四十種からなる「古資料³²」にもとづいて編纂されたものである。この「古資料」は、森祖道[1984: 52-53]によると、「インド的原始仏教的古層」と「スリランカの上座仏教的新層」という

31 森祖道[1984: 465-466]を参照。この「紀元後4世紀冒頭」というのは、具体的にはMahāsena王(A.D. 276-303)までとなる。

32 森祖道[1984, 1989]とMori, S[1987]とを参照。そのなかで実際に『長部註』のソースとなる「古資料」の名称は、Mahā-aṭṭhakathā, Dīghaṭṭhakathā, 単数形と複数形とのAṭṭhakathā, Porāṇā, Porāṇakattherā, Bhāṇakā, Aṭṭhakathācariyā, Ācariyavāda, Therasallāpa, Ariyavaṃsa, Sīhalaṭṭhakathā, Porāṇaṭṭhakathā, Mūlaṭṭhakathā (Mūlakatṭhakathā)という計十四種がある。

アッタカターの二層から構成されている。このうちの前者を「古資料の古層」と名づけ、その内容の一端を解明したものが越後屋正行 [2016] である。したがって上述してきたアッタカター文献の内容は、基本的にパーリ三蔵における常に酔っている（慢性飲用）といった「アルコール依存のような様相」にもとづいて記載された伝承であるので、パーリ三蔵の内容を基幹とした「古資料の古層」による記述の所産と考えるのが妥当である。

3. pamāda と appamāda との関係性

ここまで「酒飲み (soṇḍa)」、「大酒家 (pipāsa, pipāsā)」、mada (√mad)、pamāda (pa-√mad) という四つの語句に注目して調査してきた結果、これらの語句は「アルコール依存のような様相」の内容と関連していることが判明した。この内容は「古資料の古層」による記述にもとづいたものであり、(1) アルコールの慢性飲用（酩酊）によって常に酔っている状況（前後不覚の状況）、(2) 「常に飲酒したい」という欲求や欲望 (kāma) がともなった状況、(3) アルコールの慢性飲用によって酒が止められない状況となる。

ここからは南方上座部大寺派における修行観の一端を明らかにすべく、これらの語句のうち、pamāda (放逸) の語句に注目して appamāda (不放逸) の語句との関係性がどのようなものであるかを解明していく。

この pamāda と appamāda との関係性が端的に示されているのが、『法句』における「不放逸 (appamāda) は不死 (amata, 涅槃³³) の語句である。放逸 (pamāda) は死 (maccu) の語句である。放逸にならないならば、死ぬことがない。放逸になるならば、例えば死んだ者 (mata) のようである³⁴」(Dhp. 21) という記述であろう。上述してきたように pamā-

33 『長部註』「クータダタ経註」は、以下のように解説している。

ariyasāvakaṇaṃ pana maggasampayuttā viratī setughātaviratī nāma. tattha purimā dve viratiyo yaṃ voropanādivasena vītikkamitabbam jīvitindriyādivatthu, taṃ ārammaṇaṃ katvā pavattanti. pacchimā nibbānārammaṇāva. ettha ca yo pañca sikkhāpadāni ekato gaṇhatī, tassa ekasmiṃ bhinne sabbāni bhinnāni honti. yo ekekaṃ gaṇhatī, so yaṃ vītikkamati, tadeva bhijjati. setughātaviratiyā pana bhedo nāma natthi.

bhavantarepi hi ariyasāvako jīvitahetupi neva pāṇaṃ hanati na suraṃ pivati. sacepissa suraṅka khīraṅka missetvā mukhe pakkhipanti, khīrameva pavisati, na surā. yathā kiṃ?

koṇcasakuṇānaṃ khīramissake udake khīrameva pavisati, na udakaṃ. idaṃ yonisiddhanti ce.

idaṃ dhammatāsiddhanti ca veditabbam.

「聖なる弟子たちの道に相応した離が悪習の打破による離 (setughātavirati) と言われる。そのうち、前の二の離 (得られた離と受持の離) は、命根などの基因が奪うことなどによって違犯すべきものになるという、そのことを所縁にして起こる。後のもの (悪習の打破による離) は、涅槃 (nibbāna) を所縁にして [起こる]。このうち、五の学処 (sikkhāpada) を一緒にして取るという、彼に一が破壊されたならば、すべてが破壊したものになる。一々のものを取り、彼が違犯するならば、それだけが破壊する。しかし悪習の打破による離に破壊はない。

なぜなら他の有でも聖なる弟子 (ariyasāvaka) は生命によって生物を殺さず、穀酒を飲まないからである。もし彼が穀酒と牛乳を混合し、口に含んでも牛乳だけが入り、穀酒は [入ら] ない。たとえば、どのようにか。鷲鳥が牛乳を混合した水において牛乳だけを入れ、水を [入れ] ない。このことは胎 (yonī) によって完成したのか。

このことは、法性 (dhammatā) によって完成したものであると知られるべきである」(DA: I. 272-273 [305])

この解説における「悪習」というのは、殺生、偷盗、邪淫、妄語、飲酒のことであり、この悪習を打破して離れることは涅槃を所縁としたものとなる。したがって飲酒を離れるといった不放逸は、涅槃と関係するものになり得る。

da を「飲酒の過失」という点から見ると、死にも至るほどの重い過失であるので、『法句』における「死の語句」や「死んだ者」という記述と共通するところがある³⁵。『法句』では、この *pamāda* (死の語句) に対して *appamāda* を「不死の語句」としているのので、この点では完全に対極をなすものとなっている。

そこでこの *appamāda* について『長部』「大般涅槃經」では、「諸行は衰滅する性質です。不放逸をもって努めなさい³⁶」(DN: II. 128 [155-156]) と記載し、仏の最後の言葉 (*pacchimā vācā*) として伝えている。対応する『長阿含經』「遊行經」では、「去り来る行は無常です。滅することが現れます。放逸することがないように³⁷」(T1. 26b) と記述している³⁸。この場合の *appamāda* は自分自身で実践すべき項目となる。

また『長部』「十増經」では、「利益の多い (*bahukāro*) 一法とは、どのようなものでしょうか。もろもろの善法における不放逸 (*appamāda*) です。これが利益の多い一法です³⁹」(DN: III. 227 [272]) と記述している。対応する『長阿含經』「十上經」では、「一つの成就すべき法とは、どのようなものでしょうか。いわゆるもろもろの善法において放逸にならないことです⁴⁰」(T1. 53a) と記載している。この場合の *appamāda* は利益の多いもろもろの善法を助けるべき (成就すべき) 項目となる。したがって *appamāda* は自分自身でもろもろの善法を実践すべきことと解釈できる。

この『長部』「大般涅槃經」に対応する『長部註』「大般涅槃經註」は、以下のように説明している。

「不放逸をもって努めなさい (*appamādena sampādeṭṭha*) とは、念を不在にしないこと (*satiavippavāsa*) によってすべての務めを得なさいということである。以上のように世尊は (*bhagavā*) 般涅槃の床において臥し、四十五年間にわたって与えられた教誡のすべてを (*ovādaṃ sabbam*) この不放逸 (*appamāda*) の語句に含め、与えられた⁴¹」

34 *appamādo amatapadaṃ, pamādo maccuno padaṃ. appamattā na mīyanti, ye pamattā yathā matā.*

35 『長部註』「大般涅槃經註」は、以下のように説明している。

māro pāpimāti ettha māroṭi satte anathe niyojento māreṭṭi māro. pāpimāti tasveva vevacaṇaṃ. so hi pāpadhammasamānāgatattā, "pāpimā"ti vuccati. kaṇho, antako, namuci, pamattabandhūtipi tasveva nāmāni.

「悪魔波旬 (*māro pāpimā*) というこのうち、悪魔 (*māro*) とは、有情たちを無意義に促しながら殺す (*māreti*) から悪魔 (*māro*) である。波旬 (*pāpimā*) とは、その同義語である。なぜなら彼は悪しき法をそなえていたから、「波旬」と説かれる。彼には黒い者、死神、魔、放逸の親族という名前がある」(DA: II. 145 [555])

この説明からも放逸 (悪魔) が有情を殺す (*māreti*) といった死 [神] (*namuci*) と関連していることがうかがえる。

36 *vayadhammā saṅkhārā appamādena sampādeṭṭha.*

37 去來行無常 現滅無放逸。

38 室寺義仁 [2010: 276-283] では、ブツダの最後の言葉である「怠ることなく努めなさい」(不放逸) の翻訳事例をいくつか紹介している。また室寺義仁 [2010] は、この「不放逸」の教えにもとづいて、ヴェスバンドゥ (世親) が「解脱」や「注意力 (*manaskāra*)」の教え、『般若經』が「空」や「無心」の教えなどといった思想を深化させていったということを指摘している。

39 *katamo eko dhammo bahukāro? appamādo kusalesu dhammesu. ayam eko dhammo bahukāro.*

40 云何一成法。謂於諸善法能不放逸。

(DA: II. 185 [593])

ここでは「世尊の教誡のすべて」（仏説⁴²）を指し示す内容が「不放逸」となるが、その具体的な内容が「念を不在にしないこと（satiavippavāsa）」になる。このように不放逸にて念を保つべきことについて『長部註』『梵網經註』は「不放逸（appamādo）は、念を不在にしないことと説かれる⁴³」（DA: I. 97 [104]）と説いている。『長部註』『大獅子吼經註』は「不放逸となり（appamatto）とは、業処（kammaṭṭhāna）における念を捨てないままということである⁴⁴」（DA: I. 299 [363]）と述べている。『長部註』『歡喜經註』は「不放逸（appamādaṃ）とは、念を失わないことである⁴⁵」（DA: III. 71 [888]）と記述している。さらに『長部註』『大般涅槃經註』では「不放逸（appamattā）とは、それ（真実の目的（阿羅漢果）⁴⁶，sārattha）について迷うことのない念である⁴⁷」（DA: II. 175 [583]）と記載している。

これらの註釈内容をまとめると、appamādaの具体的な内容は念を失うことなく、真実の目的（阿羅漢果）について迷わずに念を保つべきこととして理解されている。

つぎに上記の『長部』『十増經』に対応する『長部註』『十増經註』は、以下のようにもろもろの善法の内容を解説している。

「そのうち、もろもろの善法における不放逸（appamādo kusalesu dhammesu）とは、すべての利益、資助となる不放逸について説く。なぜならこの不放逸とは、戒の円満、根の防護、食において適量を知ること、不眠の努力、七の正法⁴⁸、觀の胎を取らせること、義無碍解など⁴⁹、戒蘊などの五の法蘊⁵⁰、道理と非道理、大住の等至、〔四〕聖諦・〔四〕念処などの〔三十七〕菩提分、觀の智などの八明⁵¹という、すべての無過失な状態のもろもろの善法における多くの資助であるからである⁵²」（DA: III. 239

41 appamādena sampādeṭhāti satiavippavāsenā sabbakiccāni sampādeyyātha. iti bhagavā parinibbānāmañce nipanno pañcaccattālīsa-vassāni dinnam ovādaṃ sabbam ekasmiṃ appamādapadeyeva pakkhipitvā adāsi.

42 この「仏説」については越後屋正行 [2016: 50-63, 2017] を参照。

43 appamādo vuccati satiṭvā avippavāso.

44 appamattoti kammaṭṭhāne satim avijahanto.

45 appamādanti satiavippavāsam.

46 『長部註』『大般涅槃經註』は、以下のように解説している。

sāratthe ghaṭṭhāti uttamatthe arahatte ghaṭṭha.

「真実の目的に対して励みなさい（sāratthe ghaṭṭha）とは、無上の目的である阿羅漢果に対して励みなさいということである」（DA: II. 174 [583]）

この解説から「真実の目的」というのは「阿羅漢果」とであると解釈されている。

47 appamattāti tattha avippamuttasati.

48 satta-saddhamma. (1) 信、(2) 慚、(3) 愧、(4) 多聞、(5) 励み精進すること、(6) 念を現前すること、(7) 慧のこと。

49 paṭisambhidā. 四無碍解、理解に関する智のこと。「四無碍解」とは、義無碍解、法無碍解、詞無碍解、弁無碍解のこと。

50 戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、解脱智見蘊のこと。

[1055])

この解説によってもろもろの善法の内容(項目)が明確になっており、*appamāda* はもろもろの善法の実践を助けることとして理解されている。

以上の註釈内容を総括すると、『長部註』における *appamāda* は念を失わず、真実の目的(阿羅漢果)について迷わず、もろもろの善法を実践すべきこととして把握されていると考える。

つぎに「念 (*sati*, *Mindfulness* (マインドフルネス))⁵³」に関する『長部註』の解釈の一端を見ていく。『長部註』「沙門果経註」では、「正念と正知をそなえ (*satisampajañña samannāgato*) とは、「進んでいる場合にも、戻っている場合にも」云々という七の根拠において正念 (*sati*) と正知をそなえということである⁵⁴」(DA: I. 164 [182]) と説かれている。この「七の根拠」というのは『長部』「沙門果経」(DN: I. 67 [70-71])によると、以下のようなものである。

- (1) 進んでいる場合にも、戻っている場合にも正念と正知を作ること。
- (2) 眺めた場合にも、観察した場合にも正念と正知を作ること。
- (3) 曲げた場合にも、伸ばした場合にも正念と正知を作ること。
- (4) 大衣・鉢と衣を保持することにおいても正念と正知を作ること。
- (5) 食べた場合にも、飲んだ場合にも、噛んだ場合にも、味わった場合にも正念と正知を作ること。
- (6) 大便・小便の行為においても正念と正知を作ること。
- (7) 行った場合にも、立った場合にも、坐った場合にも、眠った場合にも、目覚めた場合にも、語った場合にも、沈黙の状態においても正念と正知を作ること。

51 対応する『長部復註』「十増経復註」は、以下のように説明している。

vipassanānāṇādisūti ādi-saddena manomayiddhi ādikāni saṅgaṇhāti. aṭṭhasu vijjāsūti Ambaṭṭhasutte āgatanayāsu aṭṭhasu vijjāsu.
「観の智など (*vipassanānāṇādisu*) というなど (*ādi*) の語によって意からなる神変などを含む。八明 (*aṭṭhasu vijjāsu*) とは、「アンパッタ経」において (*Ambaṭṭhasutte*) 述べられた仕方の八明である」(DAT: III. 278 [358])

この説明にしたがって『長部』「アンパッタ経」を見てみると、八明は(1) 観の智、(2) 意からなる神変の智、(3) 種々の神変の智、(4) 天耳の智、(5) 他心智、(6) 宿住随念智、(7) 天眼の智、(8) 漏尽智のこととなる。

- 52 *tattha appamādo kusalesu dhammesūti sabbathakam upakārakam appamādam kathesi. ayañhi appamādo nāma silāpūraṇe, indriyasamvare, bhōjane mattaññutāya, jāgariyānuyoḡe, sattasu saddhammesu, vipassanāgabbham gānhāpane, atthapaṭisambhidādisu, silakkhandhādiṭṭhapañcadhammakhandhesu, thānāṭṭhānesu, mahāvihārasamāpattiyam, ariyasaccesu, satipaṭṭhānādisu, bodhipakkhiyeyu, vipassanānāṇādisu aṭṭhasu vijjāsūti sabbesu anavajjaṭṭhena kusalesu dhammesu bahūpakāro.*
- 53 井上ウイマラ [2013] では、「念」を「気づき」と解釈し、内外、自他、師弟関係における互恵的義務、看病の実践、身口意の三業に対する観察の仕方などの視点から「念」について多角的に論じている。また念に関する先行研究についても多く触れられているので、適宜参照した。
- 54 *satisampajañña samannāgatoti abhikkante paṭikkantetiādisu sattasu thānesu satiyā ceva sampajañña ca samannāgato hoti.*

これらの根拠から判断すると、自分自身のいつどのような行動においても念をそなえることの重要性が示されたこととなる。このように自分自身が〔行動する〕空間において念を保つことを「空間的な念」と名づける。この「空間的な念」については、『長部註』『大念処経註』が「摂法覚支」のうちの「根の平等の行道 (indriyasamattapaṭipādanā)」について註釈するなかで以下のように解説している。

「念はすべての場所（五根⁵⁵）で (sabbattha) 強いことがふさわしい。なぜなら念は心を、掉挙 (uddhacca) の側である信・精進・慧によって掉挙に落ちることより、懈怠 (kosajja) の側である定によって懈怠に落ちることより守るからである。それゆえにそれは、すべての調味料における塩と芳香のように、すべての王の仕事についてすべてを管理する大臣のように、すべての場所で (sabbattha) 望まれるべきである。それゆえに『世尊は念をすべての場合に (sabbatthikā) 説かれた。何を根拠としてか？なぜなら心は念を所依とするからである。念は守護の現前 (ārakkhapaccupaṭṭhāna) である。念を除いて心の策励・抑止 (paggahaniggaha) はない』と言った⁵⁶」(DA: II. 378 [788])

補足説明すると、この解説では信・精進（勤）・念・定・慧からなる「五根」における念の重要性と心の守護とが説かれている。信・精進・慧の実践によりすぎると、心が掉挙（熱中しすぎる状態）に偏ってしまう。定の実践によりすぎると、安楽な状態になってしまい心が懈怠（怠けた状態）に偏ってしまう。念を強くして保つことによって根の平等の行道（程よい状態・中庸による五根の行道・実践）が可能となり、心を守ることができるといふものである⁵⁷。ここでも「すべての場所」「すべての場合」という表現によって自分自身におけるいつどのような実践〔する空間〕でも必要とされる念、すなわち「空間的な念」が示されている。

つぎに『長部註』『結集経註』は、以下のような伝承を述べている。

「そこでかのお方（仏）を、悪魔が菩薩の時代 (bodhisattakāla) に六年間、仏の時代 (buddhakāla) に一年間、従っていたが、どのような過失も見ず、このことを説いて出発した。『私は七年間、世尊に一步一步、つき従っていた。念をそなえた (sati-

55 この「五根」については『長部復註』『大念処経復註』(DAT: II. 328 [415])における解説によって補足した。

56 *sati pana sabbattha balavaṭi vaṭṭati. sati hi cittaṃ uddhaccapakkhikānaṃ saddhāvīriyapaññānaṃ vasena uddhaccapātato, kosajjapakkhikena ca samādhinā kosajjapātato rakkhati. tasmā sā loṇadhūpanaṃ viya sabbabyañjanaṃ, sabbakammikaamacco viya ca, sabbarājakesu sabbattha icchitabbā. tenāha "sati ca pana sabbatthikā vuttā bhagavatā, kiṃ kāraṇā? cittañhi satipaṭisaraṇaṃ, āraḍḍhapaccupaṭṭhānā ca sati, na vinā satiyā cittassa paggahaniggaho hoti" ti.*

57 この解説は、道元禪師（1200～1253年）の『普勸坐禅儀』（1227年成立）における「所謂坐禅は習禅には非ず。唯だ是れ安楽の法門なり、菩提を究尽するの修証なり」という言葉と通じるものがある。つまり定（坐禅）のし過ぎ（習禅）は安楽になり過ぎるが、五根を中庸にした実践による坐禅は真実の安楽の法門となるのである。

mant) 正等覚者に機会は得られなかった⁵⁸⁾と⁵⁹⁾」(DA: III. 176 [993-994])

この伝承は悪魔が計七年間、仏につきまっていたが、いつどこでも念をそなえていたためにつけ入る隙がまったくなかったというものである。このように自分自身が時間的に継続して念を保ち続けていることを「時間的な念」と名づける。

同じく『長部註』『結集経註』は「念の守護によって心を〔そなえています〕(satārakkhena cetasā)とは、漏尽者の三門において常に(sabbakāla)念は守護の作用を成就する⁶⁰⁾」(DA: III. 234 [1051])と解説している。この「常に」という表現によって心を守るために自分自身が継続して保つ念、すなわち「時間的な念」が示されている。また身・口・意からなる三門と念との関係性については注目すべき内容であるので、後に触れる。

以上、『長部註』における appamāda と sati とに関する註釈内容を総合的にまとめると、いつでも、どこでも心の守護に資する念(sati)を失わず、真実の目的(阿羅漢果)について迷わず、もろもろの善法を実践すべきことが不放逸(appamāda)であると理解してよいのではなかろうか。

さて、ここからは再び pamāda によって引きおこされる「アルコール依存のような様相」の問題に戻るが、この問題を現代医学と身門・口門・意門からなる三門という観点より見ると、アルコール(飲酒)はほとんど例外なく口(口門)を通して体内(身門)に入る。そして上述した(1)アルコールの慢性飲用(酩酊)によって常に酔っている状況(前後不覚の状況)、(2)「常に飲酒したい」という欲求や欲望(kāma)がともなった状況、(3)アルコールの慢性飲用によって酒が止められない状況が発生すると、「アルコールの精神依存のような様相」、すなわち精神(意門)に障害(依存性、習慣性)が生れる。そこから徐々にアルコールへの耐性が形成され、さらに(1)口〔門〕から意思をもって多量に飲酒し続けて酔っぱらってしまう。やがて紛争(言い争い、殴り合い)や心身の病気などといったさまざまな「飲酒の過失」が身体(身門)と口〔門〕と精神(意門)とを通して発生するようになりつつも、(2、3)身体(身門)がアルコールをいつでも、どこでも望んで止められない状況(満足できない状況)、すなわち「アルコールの身体依存のような様相」が生まれてしまう。このようにアルコールの影響が身門(アルコールの身体依存のような様相)・口門(飲酒、慢性飲用)・意門(アルコールの精神依存のような様相)をくり返し循環し続けるような状況(輪廻するような状況)になると、「アルコール依存症⁶¹⁾」のような様相になってしまうと考えている。

58 引用文の出典は『経集』(Sn. 448 [446])となる。

59 atha naṃ māro bodhisattakāle chabbassāni buddhakāle ekaṃ vassaṃ anubandhitvā kiñci vajjaṃ appassitvā idaṃ vatvā pakkāmi, "sattavassāni bhagavantaṃ, anubandhiṃ padāpadaṃ, otāraṃ nādhigacchissaṃ, sambuddhassa saṃmato"ti.

60 satārakkhena cetasāti khīṇāsavassa hi tisu dvāresu sabbakālaṃ sati ārakkhaccekkaṃ sādheti.

61 「アルコール依存症」の詳細については斎藤学・柳田知司・鳥田一男[1979]を参照。

この「アルコール依存のような様相」は、「いつでも、どこでも飲酒したい」、「いつでも、どこでも酔っている」といったことを永続する状況であるが、この「いつでも、どこでも」といった「常住性」という一点においては、本来対極であったはずの「アルコール依存のような様相」を引きおこす *pamāda* と *appamāda* とが完全に一致している⁶²。すなわち「時間的・空間的」に「常に」意思をもって飲酒したい、酔いたいという「飲酒〔欲〕の常住性」が *pamāda* であり、「時間的・空間的」に「常に」念を失わないという「念の常住性」が *appamāda* である。

このように考えたとき、南方上座部大寺派が *pamāda* に「アルコール依存のような様相」の意味を付した理由の一端が見えてくる。すなわち南方上座部大寺派では「時間的・空間的」に「常に」念を失わない *appamāda* の実践（修行）が最も重要視されていたからこそ、その対極である *pamāda* に「時間的・空間的」に「常に～したい (*kāma*)」といった欲求や欲望を有する「アルコール依存のような様相」、つまり意思をもった悪しき飲酒〔欲〕の常住性を垣間見ていたのではなかろうかと想定できる。

ひるがえって見てみると、「アルコール依存のような様相」への対策としては、常に念をそなえた不放逸の実践が有効な手段となるのではないか。ひいては現代医学において明らかにされつつある「アルコール問題」への対策としても、この実践が有効な手段になり得るのではないかと考えている。さらにこの実践を我々の日常生活に当てはめると、「常に～したい」「絶対に止められない」といった日常の悪習を打破して心（三門）を守ることになるので、常に念は欠かすことのできない南方上座部大寺派における修行観の一端であると解釈するのが妥当である。

4. 結論

パーリ三蔵（長部）における「酒飲み (*soṇḍa*)」、「大酒家 (*pipāsa, pipāsā*)」、「酩酊 (*mada, √ mad*)」、「放逸 (*pamāda, pa-√ mad*)」という四つの語句に注目してアツカター文献（長部註や本生註）を調査した結果、すべての語句に「アルコール依存のような様相」の内容が認められた。この内容は、（1）アルコールの慢性飲用（酩酊）によって常に酔っている状況（前後不覚の状況）、（2）「常に飲酒したい」という欲求や欲望 (*kāma*) がともなった状況、（3）アルコールの慢性飲用によって酒が止められない状況となる。南方上座部大寺派で把握していたこれらの内容は、パーリ三蔵の内容を基幹とした「古資料の古層」（インドの原始仏教の古層）による記述の所産になる。

つぎに *pamāda* と *appamāda* との関係性について、パーリ三蔵（法句）では *pamāda* を死とし、*appamāda* を不死（涅槃）とする解釈があり、完全なる対極の関係と見ている。そ

62 このように「時間的・空間的」な観点から対極のものが一致するという点は、たとえば「煩惱即菩提」、「生死即涅槃」といったような難解な仏教の言葉への理解にも資するのではないかと考えている。

してアッタカター文献(長部註)では appamāda と念 (sati) との関係性を重要視し、ap-pamāda について、「いつでも、どこでも」心の守護に資する念を失うことなく、真実の目的(阿羅漢果)について迷うことなく、もろもろの善法を実践すべきこととして把握している。いわば「念の常住性」を重んじている。

一方の pamāda は「アルコール依存のような様相」を引きおこすものである。身門(身体)には「アルコールの身体依存のような様相」、口門には「飲酒、慢性飲用」、意門(心、精神)には「アルコールの精神依存のような様相」が発生することで、三門にアルコールの影響がくり返し循環し続けながらさまざまな「飲酒の過失」を起こす状況になってしまい、「アルコール依存〔症〕のような様相」が生まれてしまう。その結果、確固たる意思をもって「いつでも、どこでも飲酒したい」という欲求や欲望(kāma)、「酒は絶対に止められない」という日常の悪習に三門が征服されて、アルコールから永続的に離れることができなくなる。いわば「飲酒〔欲〕の常住性」がそなわる。

pamāda と appamāda とは、「いつでも、どこでも」(時間的・空間的)といった「常住性」という一点においては完全に一致する関係となる。したがって三門の守護に資する念を常にそなえた不放逸の実践(修行)は、三門に永続する「アルコール依存のような様相」への対策として有効な手段となり、ひいては現代医学における「アルコール問題」全般への対策にも資するのではないか。ひろく不放逸と念とに関する註釈内容をいくつか見ていると、実際の「アルコール問題」への対策に役立ちそうな記述もないことはない。具体的には断酒へのプログラム、アルコール依存症の内観療法、不眠対策などへの有効な手段が不放逸と念とであると想定しているが、これらについての議論は今後の課題としたい。

以上のような南方上座部大寺派における修行観の一端である appamāda (不放逸)の実践は、日常生活については言うまでもなく、現代医学の領域においても有効な手段になり得る可能性があるということを提言して、本論文の結論とする。

略号

B[°] = ビルマ第六結集版 (° は edition を示す)

R[°] = ロンドン・PTS 版

T = 『大正新脩大藏経』

DA = *Dīghatthakathā* (*Sumaṅgalavilāsini*)

DAṬ = *Dīghatthakathāṭṭhikā* (*Līnatthavaṇṇanā*)

DN = *Dīghanikāya*

ItA = *Itivuttakathakathā* (Pd)

142
(399)

KhpA = *Khuddakapāṭhaṭṭhakathā* (*Paramattajotikā*)

MN = *Majjhimanikāya*

MNdA = *Mahā-niddesaṭṭhakathā* (*Saddhammapajjotikā*)

Pd = *Paramatthadīpanī*

Vibh = *Vibhaṅga*

参考文献

井上ウィマラ

[2013] 「Satipatṭhāna sutta における「内・外」について」『パーリ学仏教文化学』#27, pp. (1)-(19).

越後屋正行

[2016] 『『長部註』(Sumaṅgalavilāsinī) における源泉資料の研究』(東洋大学への博士学位請求論文).

[2016a] 『『長部註』(Sumaṅgalavilāsinī) における源泉資料の研究(和訳篇)』(東洋大学への博士学位請求論文).

[2016b] 『『長部註』(Sumaṅgalavilāsinī) における源泉資料の研究(資料篇)』(東洋大学への博士学位請求論文).

[2017] 「『長部註』における伝説の一考察」『東洋学研究』#54, pp. (75)-(91).

[2018] 「『長部註』における飲酒の過失の分析：北伝資料との比較研究」『東洋学研究』#55, pp. (123)-(145).

大地原誠玄

[1979] 『スシュルタ本集：古典インド医学綱要書』(臨川書店).

斎藤学・柳田知司・島田一男

[1979] 『アルコール依存症』(有斐閣選書).

杉本卓洲

[1985] 「飲酒戒考」『金沢大学文学部論集 行動科学科篇』#5, pp. 77-93.

パトリック・E・マクガヴァン(著)、藤原多伽夫(訳)

[2018] 『酒の起源：最古のワイン、ビール、アルコール飲料を探す旅』(白揚社).

前田惠學

[1964] 『原始仏教正典の成立史研究』(山喜房仏書林).

室寺義仁

[2010] 「思想の深化」『新アジア仏教史03 インド III 仏典から見た仏教世界』(佼成出版社), pp. 271-331.

森祖道

[1984] 『パーリ仏教註釈文献の研究：アッタカターの上座部的様相』(山喜房仏書林).

[1989] 「アリアヴァンサとアリアヴァンサカター」『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』(平楽寺書店), pp. (225)-(244).

森口真衣

- [2008] 「『医学書』としての『スシュルタサンヒター』：伝統的構成に対する検討」『印度哲学仏教学』#23, pp. 246-264.
[2012] 「古代インドにおけるアルコール関連の精神医学的問題」『印度学仏教学研究』#60-2, pp. (275)-(280).

矢野道雄

- [1988] 『インド医学概論：チャラカ・サンヒター』（朝日出版社）.

Mori, S.

- [1987] “Some Minor Sources for the Pāli Aṭṭhakathās: with Reference to Lottermoser’s study”, 『高崎直道博士還暦記念 インド学仏教学論集』（春秋社）, pp. 685-696.

v. Hinüber, O.

- [1996] *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin: Walter de Gruyter.

〈キーワード〉『長部』(*Dīghanikāya*) と『長部註』(*Sumaṅgalavīlāsini*) と『本生註』と『長阿含経』, mada (酩酊) と pamāda (放逸) と appamāda (不放逸), 急性酩酊症状と急性アルコール中毒とアルコール依存と飲酒の過失, ap-pamāda と sati (念), 酒飲み (soṇḍa) と大酒家 (pipāsa, pipāsā) と $\sqrt{\text{mad}}$ と pa- $\sqrt{\text{mad}}$